

成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち

池尻 陽子

0 はじめに

チベットにおいてガンデンポタン政権が誕生する少し前、ユーラシア東隅の遼東から興った満洲人政権が台頭し、南モンゴル諸部を傘下に収めると、北のハルハ＝モンゴルの情勢を窺いつつ明朝と対峙していた。1636年、満洲の君主（ハン）であったホンタイジ（Man. Hong taiji 1592–1643, 在位 1626–43）は、満洲人・モンゴル人・漢人からの推戴を受ける形で登極し、国号を「大清（Man. Daicing）」とした。いわゆる、清朝の成立である。そしてその直後から、ホンタイジはハルハ＝モンゴル首長層と連携してチベットへ使者を送り、ゲルク派の高僧ダライラマ五世（Ngag dbang blo bzang rgya mtsho 1617–82）を招請せんと活動を始める。これが清朝と中央チベットとの間で行われた最初の公式交渉である。この招請活動はホンタイジ存命中には結実しなかったものの、続く順治朝（1643–61）において、北京遷都を果たし中国支配を本格化させていく中でも継続され、順治帝親政開始直後の順治9–10年（1652–53）ついに実現に至り、清・チベット関係をさらに進展させる契機となった。

本稿では、この清・チベット関係の黎明期に両者の間を仲介したチベット仏教僧たちに着目し、彼らの所属するコミュニティや人脈を分析することで、彼らが清・チベット関係構築に果たした役割を考察する。

0.1 清朝史料に現れる最初期の清・チベット関係仲介者

本稿では、この時期に清・チベット関係を仲介した人物として、清朝史料に頻繁に現れる二人のチベット仏教僧に特に注目する。一人は「イラグクサン＝フトクト」（Mon. Ilayüysan qutuytu）というモンゴル語の称号を持つ人物で、チベットからホンタイジのもとに派遣された最初のチベット大使とされる（Ahmad 1970; 馬・成 1986; 若松 1994; 李 2005）。もう一人は、順治年間の北京で活躍したパンディタ＝ノモンハン（Man. Bandida nomon han）で、ダライラマ五世が北京を巡錫した際、迎接の指揮を委ねられた皇帝膝下の僧である（若松 1996; 黄 1993, 47–48; 石濱 2011, 41–73; 池尻 2007）。両者について、多くの先行研究が上述の称号と仲介者としての事績の一端を取り上げてきたが、彼らの人物像は依拠する史料によって異なり、研究者の間で見解が一致していない。彼らの活動がその後の歴史に何を齎したのかを正當に評価するには、まずは彼らは何者であるかを解明する必要があるだろう。そこで本稿では、最初期の清・チベット関係構築に特に貢献した両者について、同時代一次史料を用いてより正確な人物比定を行う。また、その過程で導き出されるアムド東部の寺院と彼らとの関わりを整理し、清朝のチベット仏教政策史上にいかなる意義をもつかについても検討したい。

1 二人の僧をめぐる先行研究の見解

1.1 イラグクサン＝フトクトについて

「イラグクサン＝フトクト」は、モンゴル語で「勝利せる聖者」を意味し、当時モンゴル・チベットの高僧に対してよく用いられた称号である。本稿で取り上げる人物以外にも、歴史上複数の「イラグクサン＝フトクト」が清朝と関わりを持ち、史料中に同名異人が混在している。馬・成（1986）は、それら複数のイラグクサン＝フトクトを整理し、それぞれを正確に比定する試みを行っている。その後、若松（1994）がチベット語・モンゴル語史料を用いて馬・成の誤りを幾つか修正し、さらに李（2005）が本稿で取り上げるイラグクサン＝フトクトについて専論し、清朝の檔案史料を用いたより精緻な研究を発表している。これらの先行研究の成果を基に、まずは最初のチベット大使としての事績をみていきたい。

本稿で取り上げるイラグクサン＝フトクトは、名をセチェン＝チュージェ (Se chen chos rje) といい、グーシ＝チュージェとも呼ばれていた⁽¹⁾。D5N (I 124a) によると、鉄辰年 (1640) にパンチェンラマ一世 (Blo bzang chos kyi rgyal mtshan 1570–1662) とダライラマ五世の命を受け、新興の清朝を施主として獲得するために使者として派遣されることとなった。ET (323–24) にはさらに、この際両ラマから「イラグクサン＝フトクト」の称号を授与されたとの記述があるが、これは D5N などチベット語史料にはみられない記事であるため、その信憑性についてここで検討しておく。ET はオルドス部のサガン＝セチェン (Mon. Sayang sečen 1604–?) が著したモンゴルの年代記である。著者サガン＝セチェンは、このダライ・パンチェン両ラマによるセチェン＝チュージェ派遣に直接関わった当事者ではないものの、彼らと同時代人である。また李 (2005, 53–55) によれば、サガン＝セチェンの家系とセチェン＝チュージェは親密であったことが D5N や ET にも記録されている。一族きっての知識人であり、仏教を篤く信仰していたといわれるサガン＝セチェンが、同時代人でオルドス王公と親交のあったセチェン＝チュージェの経歴を書き誤るとは考えにくく、ET のセチェン＝チュージェに関する記述の信憑性は非常に高いと考えられよう。

さて、イラグクサン＝フトクト号を得たセチェン＝チュージェら一行は、崇徳 7 年 (1642) 10 月、当時清朝の都であったムクデン (Man. Mukden, 現在の中国遼寧省瀋陽市) に到着した。ホンタイジは自ら諸王・大臣らを率い、門外まで出て迎えたという⁽²⁾。それからセチェン＝チュージェらは 8 ヶ月間ムクデンに滞在した後、崇徳 8 年 (1643) 5 月、ホンタイジからの親書を携えた清朝側使節団とともにチベットへの帰途についた⁽³⁾。セチェン＝チュージェはその後、火犬年 (順治 3, 1646) 後半にはハルハに派遣されていることが D5N (I 135b) から判明するが、その翌年にあたる順治 4 年 (1647) 正月の『世祖実録』の記事に以下のように記されている。

理藩院副理事官羅多理を遣わし、故喇嘛イラグクサン＝フトクト伊拉古克三胡土克圖に鞍馬・緞匹・器皿・茶香等の物を賜う。

〔『世祖実録』卷 30, 順治 4 年正月壬戌〔20 日〕条〕

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

李 (2005, 57) はこの記事から、セチェン=チュージェは順治3年後半から順治4年正月までの時期に、ハルハにおいて死去したと指摘する。

以上がイラグクサン=フトクトことセチェン=チュージェのチベット大使としての事績の概要であるが、若松 (1994) は DC にセチェン=チュージェの略伝と思しき記述があることを指摘している。氏が指摘するのは、アムドのパージョ寺 (Bā jo'i dgon bstan pa dar rgyas gling) に関する以下の記事である。

パージョ寺テンパ=タルギェリンについて。セチェン=チュージェ=ギェルウエー=ティンレーパ=チンパ=ギャンツォ (se chen chos rje rgyal ba'i 'phrin las pa sbyin pa rgya mtsho) は、ニタン僧院の附近のカル族の家系 (kar gyi rigs) にお生まれになった。この頃、当代の女真王 (ホンタイジ) が非常に勢力を強めていたことから、パンチェン=ロサン=チュージェンと偉大なる五世の両者が「我々の側の施主として引き入れることができるか検討してみなさい」と仰った。これを受けて、第11ラプチュン鉄龍年 (1640) にムクトウン (mug tun, 即ちムクデン) にお出でになると直ちに土地に吉祥が現れたので、王 (ホンタイジ) は〔セチェン=チュージェを〕応俱僧として敬った。

(DC, 213a-b)

ここまで、確かに先ほどみたチベット大使イラグクサン=フトクトの事績と一致している。「セチェン=チュージェ=ギェルウエー=ティンレーパ」という呼称も、D5N (I 135b) で一カ所のみだが確認できる。

ところが、DC のセチェン=チュージェ略伝は以下のように続く。

猿年 (1644) の末、東の大国での政変により流賊が大明朝の崇禎帝の首都を奪取したが、制圧することはできなかったため、結局満洲人の手に落ち、〔セチェン=チュージェは〕マハーサンマタ王 (最初の転輪聖王) の首都に順治帝が初めてお着きになる〔のに相応しい〕星回りや時刻などを占って、王と一緒に北京にいらっしゃった^①。皇帝が金の玉座に鎮座なさった後、政治の安定化のために宮廷内のシンシェン (zin shan)⁽⁴⁾ という山の頂に仏塔 (北海の白塔を指す) を築き、その面前には〔ペンデン〕ラモ (lha mo) と〔獅子〕面女 (gdong can)⁽⁵⁾ の二者の所依と三本の旗を建てた^②。その三本の旗は最近いかなる理由からか、漢式の旗竿と呼ばれる三本の木の竿に変わってしまっている。外側の背面には政治の御守りさながらに黄寺 (lha khang ser po) および所依をお建てになった^③。あるとき、〔セチェン=チュージェは〕縁起かつぎのために城壁の上から角笛を鳴らして巡り歩くということを最初にお始めになり、それは今でも存続しているようである。

このようにして〔セチェン=チュージェは〕恩恵深い御方であられたので、〔皇帝は〕灌頂 (bkwan ting) の任務や新築した伽藍の扁額 (pen) を下さった^④。

(DC, 213b)

先述の如く、セチェン=チュージェはホンタイジの崩御前にチベットへ帰還しており、下線部

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

①のように順治帝とともに北京に入城することは不可能である。また、下線部②は北海の白塔、下線部③は黄寺の建立を指しているが、何れも順治8年の創建であり、順治4年初めまでに死去したセチェン＝チュージェが行えるはずがない。若松（1996, 405-09）も指摘する通り、この後半の事績は、次に取り上げるパンディタ＝ノモンハンのものである。何故両者の事績が混同されているのか、その疑問について考察する前に、まずは次節でパンディタ＝ノモンハンの事績を整理しておきたい。

1.2 パンディタ＝ノモンハンについて

順治年間の清朝において「パンディタ＝ノモンハン」と呼ばれたそのチベット仏教僧は、特に順治9-10年（1652-53）のダライラマ五世来錫時の迎接に重要な役割を果たし、D5Nでは「チャムリン＝ノムンハン」の名でその活躍が記録されている（Ahmad 1970, 179-80）。また、石濱（2007, 27-33; 2011, 41-73）によると、順治8年（1651）に順治帝の親政開始を言祝ぐため同時に建立された北京の“一塔二寺”、すなわち北海白塔・普勝寺・黄寺の建立者でもある。このように、パンディタ＝ノモンハンは順治朝のチベット仏教事業を一手に担う清朝内チベット仏教界の統率者だったのであり、その存在は後の清朝のチベット仏教への施策に大きな影響を与えている（拙稿 2007, 49-53）。

このパンディタ＝ノモンハンの出自や経歴については諸説あるが、中国の研究者に広く支持されているのが、次の黄顥（1993, 47-48）の説である⁽⁶⁾。すなわち、パンディタ＝ノモンハンとは、アムドの名刹クンブム寺の寺誌（KD）に略伝があるパードゥ御前チュージェ＝チンパ＝ギャンツォ（Pā gru zhabs drung chos rje sbyin pa rgya mtsho）なる人物であるとする⁽⁷⁾。黄顥氏が根拠とするKDの略伝とは、以下のものである。

チュージェ＝チンパ＝ギャンツォは、パンチェン＝ロサン＝チューキ＝ギェルツェンと一切をご覧になる偉大なる五世のお二方から厳粛なる授記を賜り〔それを〕お引き受けになって、アムドを経由して東方の広大な地域のムクトウン（ムクデン）という場所に到達した。いらっしゃって間もなく、吉祥なる優れたかたちの大きな前兆が起こったので、女真大王（ホンタイジ）は根本の上師として依止した。…（中略）…

それから4年目、第11ラプチュンの木猿の年（1644）…（中略）…ホル暦5月1日に順治皇帝が金の龍によって高みに上げられる王座において権力を掌握したのみならず、年月日がいつかなども〔チュージェ〕の授記のとおり起こった。それから、チュージェパは王宮に招かれて、応供上師に就任するよう要請された⁽⁸⁾。皇帝の政治を堅固にするために、〔紫禁城の中で、あなた様のラモの秘密のタンカを中に収蔵してある塔が一つあるのが、非常に不吉であるので、以後も存続するとは思われない〕と言って、黄色の王宮の境界のシンハーン（zin hān）⁽⁸⁾という山の頂に大きな塔（北海の白塔）と、その前にラモの主従三尊の所依と旗を安置した⁽⁹⁾ものは後に旗竿（chi gwan）に変わっている。敵を制圧するために城の上部からラッパ・角笛を吹奏して回るなど、縁起担ぎは現在も時々行われている。大城塞の外の北側に東黄寺（tung bhwang zi ste lha khang ser po）を建立なさった⁽⁹⁾後に、一切をご覧になる偉大なる五世が〔北京に〕いらっしゃった折にご宿泊なさった。…（中略）

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

…一切をご覧になる偉大なる五世を招請してから、仏法の主として奉じて、ダライラマの詔書を差上げたことなど、ゲルク派と福田・施主の関係になったことも、この優れた御方の善巧方便という無上の増上縁によるものである。皇帝からも優れた御方に灌頂国師の任務 (bkwan ting ko shri las ka) とパードゥ寺テンパ=タルギェリンに旨扁 (bka'i tsi pan) をも賜った^④。

(KD, 282-83)

一読してわかるように、これは前節で紹介した DC (213a-b) のセチェン=チュージェ略伝と酷似している。「チュージェ=チンパ=ギャンツォ」という呼称は DC の「セチェン=チュージェ=ギェルウェー=ティンレーパ=チンパ=ギャンツォ」を省略したもので、DC 記載のものが彼の正式な名であったと考えられる。全体に KD の方が詳しい記述になっているが、冒頭の事績がイラグクサン=フトクトのものであることや、パンディタ=ノモンハンの事績として知られる下線部①~③の記事、下線部④の皇帝から灌頂の任務と扁額を賜ったエピソードなど、プロットが完全に一致している。恐らく、DC・KD の該当部分は同じ文献に基づいて記述されたものなのであろう⁽⁹⁾。よって、黄顥 (1993, 47-48) がパンディタ=ノモンハンと同定する人物の前半生は、前節で取り上げたイラグクサン=フトクトということになるが、両者が別人であることは既に述べた通りである。イラグクサン=フトクトの本名がセチェン=チュージェであることは同時代史料である D5N・ET から確認されるので、DC・KD はイラグクサン=フトクト=セチェン=チュージェの略伝であり、後半生のエピソードとしてパンディタ=ノモンハンの事績が誤って挿入されたものと考えられる。

では、パンディタ=ノモンハンとは誰なのか。黄顥 (1993, 47-48) とは異なる人物を挙げるのが、若松 (1996, 405-10) である。若松氏は、南モンゴルのシレットウ=フレイに関する論考において、第三代ジャサク大ラマ⁽¹⁰⁾であった人物がパンディタ=ノモンハンであると指摘している。

2 シレットウ=フレイとパンディタ=ノモンハン

2.1 シレットウ=フレイの起源と始祖アシャン=マンジュシュリ

シレットウ=フレイは、現在の中国内モンゴル自治区通遼市庫倫旗に当たる。その原型は、清朝の太宗ホンタイジに厚遇されたチベット仏教僧アシャン=マンジュシュリ (A zhang manydzu shri 1550 頃-1636) という人物によって築かれた。シレットウ=フレイの歴史を論じる斉 (1987, 15-16) 及び若松 (1996, 397-404) によると、その経緯は以下のようであった。

アシャン=マンジュシュリは 1550 年代にアムド地方に生まれ、ラサのデプン僧院ゴマン学堂で学問を修めたと言われる。その伝説的な前半生はここでは割愛するが、17 世紀初頭以降、南モンゴルのハラチンやバーリンで仏法を説いていたところを、天聰 3 年 (1629) その名望を聞きつけた太宗ホンタイジから招請を受ける。翌年実際にムクデンを訪れ、非常な歓待を受けたことが清朝側の史料からも確認できる⁽¹¹⁾。その後、天聰 6 年 (1632) からムクデンの辺外に

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

位置する法庫山に住むようになり、ほどなくして家畜を伴った移動式の僧院、フレ（庫倫）⁽¹²⁾を営み現在の庫倫旗一帯に移り住んだ。これにより、該地は「マンジュシュリ＝フレ」と呼ばれるようになったという。やがて僧院は固定化され、アシャン＝マンジュシュリの後継者が代々首領として教団と属民を束ねるようになり、南モンゴルで唯一政教一致の行政システムを敷くシレットウ＝フレが誕生する。

ここで、始祖アシャン＝マンジュシュリに関する別の事柄に言及しておきたい。それは、アシャン＝マンジュシュリとアムド東部の寺院との関係である。若松（1996, 400-02）は、やはり DC のウシタク寺（U shi brag dgon chen bshad sgrub chos 'khor gling）誌を紹介している。

ウシタク大僧院シェードゥブ＝チューコルリンは、サムロ＝アシャン＝マンジュシュリがダライラマ（三世）ソナム＝ギャンツォの授記を拝受して建立したものである。六代目当主までの間、僧院は良く発展し、今となっては跡地となっている場所に収容し切れなくなったことから、座主（khri）チンパ＝ギャンツォ⁽¹³⁾の直弟子アシャン＝シレットウとパージョ僧院のナンソの両者がダライラマ五世に請願して、僧院を田舎に移設したのである。それ以降、タンリン＝リンチェン＝シェーラプ、ドツァン＝シェーラプ＝リンチェン、パーチュ＝ブンツォ＝ギェルツェン、…（中略）…パーチュ＝ルンドゥブ＝チューベル〔が歴代の座主を務めた〕。教科書はゴマン学堂と共通である。以上のように『黄瑠璃』に解説されている⁽¹⁴⁾。アシャン＝シレットウという方は、〔ダライラマ〕五世が漢土にいらっしやった際、黄寺の担当僧侶であったその御方のようなのである。

(DC, 263b)

このように、アシャン＝マンジュシュリはアムドのウシタク寺の創建者でもあった。さらに、訳文中の太線で示した部分、歴代座主の名に冠されるタンリン（thang ring）・ドツァン（gro tshang）・パーチュ（bā cu）は、それぞれタンリン寺（Thang ring dgon dga' ldan bshad sgrub gling, 龍合寺）・ドツァン寺（Gro tshang lha khang, 瞿曇寺）、そして前章で紹介したセチェン＝チュージェ創建のパージョ寺を指し、全てウシタク寺近隣、アムド東部に位置する寺の名である⁽¹⁵⁾。この事が持つ意味については第3節にて改めて検討する。

2.2 「喇嘛伝」にみられる略伝の概要

再びパンディタ＝ノモンハンとシレットウ＝フレとの関わりに話を戻す。若松がパンディタ＝ノモンハンとシレットウ＝フレを結びつける根拠とするのは、シレットウ＝フレに残る歴代ジャサク大ラマ伝記集に収録されている第三代ジャサク大ラマ伝である。この伝記集は、道光年間（1821-51）にシレットウ＝フレで成立したとみられる書物で、始祖アシャン＝マンジュシュリから第十六代のジャサク大ラマまでの歴代ジャサク大ラマそれぞれの略伝（記載は道光元年まで）が収録されている。原本はチベット語で記され、1960年にそのモンゴル語訳が作成された。しかし、文化大革命中にチベット語の原本とモンゴル語の翻訳稿が失われ、唯一モンゴル語訳の油印本のみが難を逃れたという。その油印本をもとに齊克希氏が漢語訳を作成し、注を附して発表したのが「錫勒図庫倫旗喇嘛伝匯典」（以下「喇嘛伝」と略記）である（齊 1989, 129-148; 若松 1996, 398-399）。現在、伝記集の内容を知るには、この「喇嘛伝」を利用するほ

かない。

「喇嘛伝」によると、第三代ジャサク大ラマはチャムリン＝ノモンハン＝シェーチャ＝ルンドゥブ (Byams gling no mon khan shes bya lhun grub) という人物であるという。以下、その伝記の内容を整理して記す。

[1] 清朝来訪前

12歳からテウオ＝カムツェン⁽¹⁶⁾で学問を修め、ラプチャンパの学位を取得⁽¹⁷⁾。その後、パンチェンラマー一世とダライラマ五世の命によって太宗ホンタイジのもとへ派遣される。

[2] ムクデンでの事績

38歳の時にムクデンに到着。ホンタイジはたいそう喜び、シレットウ＝フレに住むよう命じる。その後再びムクデンに招かれ、実勝寺での勤行を暫く勤める。ムクデン滞在中、王宮の四方に塔と寺を建立するようホンタイジに進言する⁽¹⁸⁾。

[3] シレットウ＝フレでの事績

ホンタイジは南モンゴル諸部から108人の僧を集め、70人をシレットウ＝フレに住まわせて、残り38人を新建の盛京四寺に分駐させる。ホンタイジ崩御後の順治3年(1646)、順治帝からシレットウ＝チュージェの称号とジャサクの印を授与される。

[4] 北京での事績

順治8年(1651)の春、順治帝により新都北京に招かれ、「パンディタ＝ノモンハン」の称号を贈られる。同年、北海の白塔や黄寺を建立し、サムロ＝アシャン＝ラプチャンパ＝チンパ＝ギャンツォを黄寺の座主に推挙する。

順治9-10年(1652-53)にかけて、ダライラマ五世の迎撃を指揮する。

羊年(1655)、シレットウ＝フレのジャサク大ラマ職を辞し、黄寺のチンパ＝ギャンツォを後任に推挙する。

[5] 晩年

引退後もシレットウ＝フレに留まり、寺廟の造営などを行う。

丁酉年(1657)2月26日に死去。

このように、「喇嘛伝」シェーチャ＝ルンドゥブ伝にもまた、「パンチェンラマー一世とダライラマ五世の命によって太宗ホンタイジのもとへ派遣」されたという、セチェン＝チュージェの事績が記されている。但し、DC・KDとはその人物名がはっきりと異なるほか、DC・KDにあるパージョ寺との関わりについて何も言及がない。その一方で、清朝(ムクデン・シレットウ＝フレ・北京)での活動については、DC・KDにはない具体的な記述が随所にみられるのが特徴である。

若松氏は、清朝来朝の経緯の部分はセチェン＝チュージェの伝記が誤って挿入されたものと指摘した上で、他の事績は全てシレットウ＝フレ第三代ジャサク大ラマのシェーチャ＝ルンドゥブのものであり、清朝史料に現れる「パンディタ＝ノモンハン」と同定した。

著者も拙稿(2007)においてこの説を採用した。その理由は、シレットウ＝フレは清初において北京と並ぶ清朝のチベット仏教の重要な拠点であったことが清朝史料から確認でき、北京のチベット仏教を統括したパンディタ＝ノモンハンがシレットウ＝フレの長であっても不思議ではないからである⁽¹⁹⁾。しかしながら、同時代一次史料によってパンディタ＝ノモンハンがシ

レトゥ＝フレの長であったことを証明するには至らなかった。石濱（2007, 2011: 41–73）が指摘するように、「喇嘛伝」がパンディタ＝ノモンハンの時代から約160年後に編纂された文献をさらに二重翻訳したものであることを考えれば、その内容のみに依拠した人物比定には疑問が残るのも事実である。

そこで、次節において、史料価値の高い同時代満洲語檔案史料を用いて「喇嘛伝」の記述の信憑性を検証していきたい。

2.3 同時代の満洲語檔案史料による「喇嘛伝」の検証

「喇嘛伝」のシェーチャ＝ルンドゥブ伝においてムクデンでの事績として記されるものうち、実勝寺での勤行については、齊克希氏が「喇嘛伝」(138)に『太宗実録』崇徳3年(1638)8月辛卯(1日)条の記述を注記しているほか、拙稿(2007, 49)でもより内容の詳しい「満文国史院檔」の同日条を示して裏付けた。

「喇嘛伝」では続けて、シェーチャ＝ルンドゥブがホントイジに四塔寺の建立を進言したと記す。竣工の際に建てられた碑文を確認すると、シェーチャが進言したことは記されていないものの、「シブジャ＝チョルジ＝ラマ (Man. sibja corji lama)・ビリクトゥ＝ナンソの2人に指示して(作った)」とあり、建立を任された僧の一人としてシェーチャ＝ルンドゥブらしき僧の名がみられる(法輪寺碑文⁽²⁰⁾)。また、この四塔寺のうちの塔が完成し開眼供養を行ったことを記す「満文国史院檔」の記事にも以下のようにある。

この後、〔盛京に〕塔を建てた礼で、塔の前に館を建て、中にシブジャ＝ラムジャムバ＝ラマ (Man. sibja ramjamba lama) が仏を奉った。

(「満文国史院檔」順治元年6月19日条)

「シブジャ＝ラムジャムバ＝ラマ」は shes bya rab 'byams pa bla ma と復元でき、「喇嘛伝」にシェーチャ＝ルンドゥブがラサでラプチャンパ号を取得したとの記述があることから、清朝でもこのように呼ばれることがあってもおかしくないであろう。このように、「喇嘛伝」の記載の通り、シェーチャ＝ルンドゥブと思われる人物が崇徳年間にムクデンに滞在しており、実勝寺での勤行や四塔寺の建立に実際に関与していたことが清朝の一次史料によって確認できるのである。

続いて順治朝における事績について、「喇嘛伝」によると、シェーチャ＝ルンドゥブは順治8年に北京に招請されてパンディタ＝ノモンハンの称号を授与され、その後一塔二寺を建立している。北京の一塔二寺建立の経緯と意義を論じた石濱(2011, 48–58)によると、一塔二寺の碑文には、「西の国(チベット)のラマ」が「仏教の力で順治帝の御代を堅固にし民に利益をなしたいと」塔寺の建立を請願したこと、順治帝がこれを嘉してラマに「ノモンハン」の称号を与え、一塔二寺を建立させたことが記されている。「西の国のラマ」の名は記されていないが、「喇嘛伝」の記述と矛盾しないうえ、ムクデンに四塔寺を建立した実績に鑑みれば、これがシェーチャ＝ルンドゥブである可能性は高いであろう。

さらに、近年刊行された『理藩院題本』をみると、パンディタ＝ノモンハンとシレトゥ＝フ

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

レーを結びつける決定的な記述が幾つも現れる。以下は、順治11年(1654)3月16日に理藩院尚書ミンガンダリらが上奏した題本中に引用されているパンディタ=ノモンハンの上奏である。

……今、パンディタ=ノモンハンの上奏すること「上ハン(順治帝)の睿鑑にパンディタ=ノモンハンが文書で上奏する。卯年(1651, 順治8), 私の夢に〔授記を〕得て,〔ネイチ〕トイン⁽²¹⁾を彼のシャビラ共々フフホトに送れと言っていた。ここにおいて,〔シレトゥ〕フレーに〔連れて来て〕合流させるといふのを聞いたが, 彼処(フフホト)に住めば吉祥であった。睿鑑で熟慮されよ。ここ(シレトゥ=フレー)に合流させた63人のシャビラを, そのシャビラに合流させれば吉祥であった。老人たる我は了解したところを上奏する。ハンの睿鑑で熟慮されよ」といっている。〔理藩〕院の議したこと「太宗皇帝の時に凡てのラマをみなシレトゥ=フレーに委ねていた。この行いが〔旨に〕悖るラマのシャビラを別に住まわせることはできない。かようなので, ネイチ=トイン=ラマのフフホトにいるシャビラをもとの〔旨の〕通り衆ラマらに合流させるよう, パンディタ=ノモンハンに委ねたい」といふ。このため旨を請い謹み上奏する。

(『理藩院題本』第1巻, 62b-63a)

この史料に記される案件にそのものについては論じる紙幅がないが, パンディタ=ノモンハンがシレトゥ=フレーの統括者であったことが明白に述べられている。

「喇嘛伝」では, シェーチャ=ルンドゥブの没年を丁酉年(順治14, 1657)であるとする。これについて, 『世祖実録』巻103, 順治13年(1656)9月庚申(15日)条にパンディタ=ノモンハンが病に罹ったことが記されており, これがもとで死去したと考えられる。

以上みてきたように, 「喇嘛伝」の記述は同時代一次史料からの裏付けが可能で, 概ね信頼できるといえよう。そうであれば何故, 清朝来訪の経緯がイラグクサン=フトクトと混同されているのか。これに関して, 若松(1996: 408)は「^{シェーチャ=ラマ}西布扎喇嘛は…(中略)…^{セチェン=チュージェ}色欽曲結の弟子となつて, 色欽曲結の建立した寺院(著者註: パージョ寺)に居たのではなからうか。こうした両者の密接な関係が誤解を生んだ原因と推察される」と述べる。しかし管見の限り, シェーチャ=ルンドゥブとパージョ寺を直接結びつける証拠は清朝史料・「喇嘛伝」・DCなどアムドの寺院誌いずれにおいても見出すことができず, 若松氏も史料的根拠を示していない。

では, セチェン=チュージェを代表とする清朝への使節団にシェーチャ=ルンドゥブが加わっていたと仮定すればどうであろうか。それならば, 両者の来朝の経緯が共通して、後に混同されてしまったことの説明がつく。しかし, 若松氏はこの可能性を否定する。その理由は, 氏はセチェン=チュージェの初来朝は崇徳7年(1642)と考え, パンチェンの指示も1640年であることから, 崇徳3年(1638)に既にムクデンにいたことが確認されているシェーチャがセチェン=チュージェの使節団に加わっていたはずがない, というものである(若松1996: 407-08)。

ここで, セチェン=チュージェの初来朝時期について, 李(2005, 55)が興味深い指摘をしている。それは, 崇徳2年(1637)10月に「セチェン=グーシ=チュージェ」という人物がムクデンのホンタイジのもとを訪問しており, これが後にイラグクサン=フトクトと呼ばれるセ

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

チェン＝チュージェと同一人物ではないか、というものである⁽²²⁾。従来の研究では、これをホシュート部長グシ＝ハンであると解釈するか⁽²³⁾、「セチェン」・「ゲーシ」・「チュージェ」という3名の使者であると解釈されてきた⁽²⁴⁾。しかし既述の如く、セチェン＝チュージェはイラグクサン＝フトクトの称号を受ける以前からゲーシの称号を有しており、この使者がセチェン＝チュージェである可能性は高い。これはシェーチャ＝ルンドゥプが実勝寺での勤行を務める1年前であり、両者はほぼ同時期にムクデンを訪れていたことになる。セチェン＝チュージェが大使となった崇徳2年(1637)のチベット使節にシェーチャ＝ルンドゥプも加わっていて、当時ホンタイジが威信をかけて建立を進めていた実勝寺のために、使節団のうちからシェーチャ＝ルンドゥプを慰留した可能性は十分に考えられよう。いずれにせよ、確実に証明する史料がない以上これも仮説に過ぎないのであるが、現段階で可能性として提示しておき、今後引き続き検討していきたい。

3 アムド東部の二寺院と清朝—清初チベット仏教界の人材供給源

前節まで、「イラグクサン＝フトクト」とはDCやKDに記されるアムド東部パージュ寺の創建者セチェン＝チュージェ＝チンパ＝ギャンツォであり、「パンディタ＝ノモンハン」とはシレトゥ＝フレエ第三代ジャサク大ラマを務めたシェーチャ＝ルンドゥプであることを、同時代一次史料によって論証した。両者は同時期に清朝を訪れ、ホンタイジのもとで重要な宗教活動を行ったという共通点があるために、後世の文献において混同されるようになったのである。しかし、実は両者の共通点はこれだけではない。それは、若松(1996)が指摘する、シレトゥ＝フレエの僧源となったアムド東部の2つの寺院に関係する。その寺院とは、アシャン＝マンジュシュリのウシタク寺、そしてセチェン＝チュージェのパージョ寺である。

若松(1996)は、「喇嘛伝」及びチベット語史料を用いて、両寺院をシレトゥ＝フレエの歴代ジャサク大ラマの供給源であることを究明した。ここではさらに新出の同時代一次史料の分析を交えて再検討し、清朝のチベット仏教政策史全体からこのことが持つ意味を考察したい。

3.1 ウシタク寺と北京及びシレトゥ＝フレエ

ウシタク寺は、始祖がアシャン＝マンジュシュリであるという点で既にシレトゥ＝フレエと関係が深いのであるが、アシャン＝マンジュシュリの後世にもシレトゥ＝フレエとの関係がみられる。本稿2.1に訳出したDCのウシタク寺誌には、該寺を後に拡張した功労者として「アシャン＝シレトゥ」の名がみえ、その人物がダライラマ五世来訪時の北京で黄寺に住持していたことが記されていた。「喇嘛伝」では、「アシャン＝ラプチャンパ＝チンパ＝ギャンツォ」の名称で記され、パンディタ＝ノモンハンがこの人物を黄寺の座主に推挙し、さらに後には自分の後継者としてシレトゥ＝フレエの長の座を譲ったとされる(本稿2.2)。また、第四代シレトゥ＝フレエジャサク大ラマとしての伝記も収録されている(「喇嘛伝」140; 若松1996, 400-02)。これは、以下の『理藩院題本』(順治16年4月7日、理藩院左侍郎シダリらの題本中の引用)からも確認できる。

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

私シレットウ＝フレーのシレットウ＝チュージェ (Man. siretu corji) は、初めに後黄寺にいたとき (順治 8 年)、八旗のボーイ＝ニルから引き受けて置いた 108 人のバンディの内、6 人のバンディが病んで亡くなった後、私はバンディタ＝ノモンハンに報告した。

(『理藩院題本』第 1 巻, 218b-220a)

これは、上奏時 (順治 16 年) シレットウ＝フレーの長であったシレットウ＝チュージェ、すなわちアシャン＝シレットウが、順治 8 年に黄寺の座主を務めていた際に 6 人の満洲人バンディが死亡した件を隠匿していたことが順治 16 年になって発覚し、申し開きをしているものである。文面から、順治 8 年の創建当時から黄寺に住持していたこと、当時からバンディタ＝ノモンハンの統属下にあったことが確認できる。さらに、シレットウ＝チュージェは別の上奏 (順治 12 年 12 月 18 日理藩院尚書シャジダラらの題本中の引用) において、シレットウ＝フレー及びウシタク寺の始祖アシャン＝マンジュシュリが自分の叔父であると述べている⁽²⁵⁾。

「喇嘛伝」によると、アシャン＝シレットウはシレットウ＝フレーのジャサク大ラマの職を辞した後「巴州地方」に行き、「巴州の寺」を別の場所に移して拡張させたという。「巴州」とはパージョであるが、アシャン＝シレットウが拡張させた寺はパージョ寺ではなくウシタク寺であるので、これは寺名ではなく地域名称としてのパージョと理解すべきである。ウシタク寺拡張は、アシャン＝シレットウとパージョ寺のナンソという人物と共同で行われている。また、2.1 でも述べた通り、ウシタク寺の歴代座主にはパージョ寺の関係者が複数おり、人材の交流があったことがわかる。若松によると、両寺院の僧たちはラサのデブン僧院ゴマン学堂に留学し、サムロ＝カムツェンに所属することになっていた。こうしたことから、氏は両寺院の間に「緊密な協力関係」があったと指摘する (若松 1996, 410)。そこから、次に述べるパージョ寺とシレットウ＝フレーの関係も構築されたと考えられる。

3.2 パージョ寺と北京及びシレットウ＝フレー

パージョ寺とシレットウ＝フレーの関係について、「喇嘛伝」(137) の第二代ジャサク大ラマの伝記に興味深い記述がある。それは、始祖アシャン＝マンジュシリの後継者選出に関する記事である。崇徳元年 (1636) 8 月にアシャン＝マンジュシリが逝去すると、太宗ホントイジは「巴素綽爾濟」なる人物に誰を後継者とすべきか問うた。それに対して「巴素綽爾濟」はアシャン＝マンジュシリの弟を推挙したという。この「巴素綽爾濟」について、若松 (1996, 405) は不明であるとしながらも、バソ＝チューキ＝ギェンツェン (Ba so chos kyi rgyal mtshan 1402-73) の第六世転生者である可能性を示している。しかし若松氏自身も認めるように、第六世転生者が当時ムクデンを訪れていたという記録はなく、シレットウ＝フレーとの接点も見られない。そこで、本稿では別の可能性を指摘したい。すなわち、「巴素綽爾濟」は「パージョ＝チュージェ (bā jo chos rje)」と復元され、パージョ寺創建者であるセチェン＝チュージェを指すのではないか。本稿 2.2 において、セチェン＝チュージェの初来朝が崇徳 2 年に遡れると指摘したが、このときにホントイジから上述の諮問があったのではなかろうか。ホントイジが同じアムド東部に寺院を創建したセチェン＝チュージェに諮問するのは理に適っているし、アシャン＝マンジュシリの弟を推挙するという的確な回答も頷けるであろう。

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

さて、DC (214b) にはパージョ寺を維持し大きくした功労者として「メルゲン＝チュージェ」(Me rgen chos rje) という人物が紹介されている⁽²⁶⁾。シレットウ＝フレーの「喇嘛伝」にも、同じ「メルゲン＝チュージェ」という名の人物がシレットウ＝フレー第七代ジャサク大ラマとして記録されており、死後に転生者を「巴州寺」に迎えたという記述があるので(「喇嘛伝」141)、DC に述べられる人物と同一とみて矛盾はない。

このメルゲン＝チュージェに関しては、拙稿(2008)において清朝史料に現れる事績をまとめている。メルゲン＝チュージェが活躍した17世紀末以降は、アムドの名刹グンルン寺からチャンキャ二世(Ngag dbang blo bzang chos ldan 1642–1715)が来朝し、次第に清朝のチベット仏教界を担うようになることが知られている。拙稿(2008)では、メルゲン＝チュージェがチャンキャ登場の直前まで清朝のチベット仏教界の統率者、北京のジャサク大ラマの職にあり、チャンキャよりも先に大国師号をも受けていたことを指摘した。

清朝史料からは、大国師メルゲン＝チュージェとパージョ寺との関係を明示する記述は見出せない。しかし、メルゲン＝チュージェが授与された大国師号をみると、興味深い事実が判明する。メルゲン＝チュージェが受けた「灌頂普惠弘善大国師」という称号に含まれる「弘善」は、パージョ寺の漢名「弘善寺」と一致するのである。さらに、順治帝がこれと全く同一の称号をセチェン＝チュージェに贈っていたという伝承が現在のパージョ寺に残っている⁽²⁷⁾。セチェン＝チュージェの国師号に関しては、現段階で伝承を裏付ける同時代史料がなく、証明する手段がないが、DC や KD のセチェン＝チュージェ伝の最後に共通して記されている点が興味深い。以上から、大国師メルゲン＝チュージェはパージョ寺の功労者であり、シレットウ＝フレー第七代ジャサク大ラマを務めた「メルゲン＝チュージェ」と同一人物であると考えられる。

おわりに 一清朝のチベット仏教界形成の礎

本稿では、先行研究で度々取り上げられながらも未だ見解が定まっていなかった2人の僧の人物像を、同時代一次史料によって再検討し、両者が別人であることを論証した。その過程で明らかになったアムド東部の二寺院とシレットウ＝フレーの関係については、若松氏によって早くから指摘されていたものの、南モンゴルの一地方とアムドの片隅の無名寺院の関係として受け止められるにとどまっていた。本稿では、最初期の清・チベット関係構築及び北京のチベット仏教界形成の過程において、シレットウ＝フレーが中心的役割を担っており、アムド東部のパージョ・ウシタク両寺院はその人材供給源として、チャンキャ登場直前まで常に指導的立場を担う僧を輩出していたことを指摘した。有名なチャンキャ＝フトクトを中心とする清朝のチベット仏教界は、このような清朝最初期からのアムド系人脈を基礎として築かれていくのである。

両寺院の出身者はラサへの留学経験からチベット側に顔が利くうえ、アムド東部という境界地域出身であるためにチベット語・モンゴル語双方に通じており、清朝とチベットを仲介するのに最適の人材として重用されたのであろう。本稿では紙幅の関係で取り上げることができなかったが、順治朝後半～康熙朝中葉に清朝からチベットへ派遣された使者に「サムロ」(bsam blo) や「アシャン」の名を冠した称号を持つ僧が多数確認できる(石濱 2001, 162–67 表 A)。この地域の僧たちは、ラサの大寺院に留学してサムロ＝カムツェンに所属することになってお

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

り、呼称に「サムロ」を冠することが多い。よって、これらの僧たちはアムド東部地域出身者であったと推測され、幾人かはシレトゥ＝フレーの「喇嘛伝」に記される人物名と一致する。彼らと清朝との関係は、アシャン＝マンジュシュリが清朝において築いたシレトゥ＝フレーが受け皿として機能することによって構築されていったのである。

従来、清朝のチベット仏教界形成は、順治朝のダライラマ五世来訪や康熙朝のチャンキャ二世来朝という画期的な事件のみを要因として語られてきた。しかし本稿で論じたように、太宗ホンタイジ時代からの人脈を基礎とし、パージョ・ウシタク両寺院から人材を獲得していたシレトゥ＝フレーが中心となって形成されていったものと捉え直すべきである。

略号表

チベット語

- D5N ngag dbang blo bzang rgya mtsho, *za hor gyi ban de ngag dbang blo bzang rgya mtsho'i 'di snang 'khrul ba'i rol rtsed rtogs brjod kyi tshul du bkod pa du ku la'i gos bzang.*
ngag dbang blo bzang rgya mtsho' i rnam thar, 西藏人民出版社, 1989.
- DC brag dgon zhabs drung dkon mchog bstan pa rab rgyas, *yul mdo smad kyi ljongs su thub bstan rin po che ji ltar dar ba'i tshul gsal bar brjod pa deb ther rgya mtsho.*
Lokesh Chandra ed., *The Ocean Annals of Amdo, Part I*, New Delhi, 1977.
漢訳版：呉均・毛継祖・馬世林訳『安多政教史』甘肅民族出版社, 1989.
- KD gser tog blo bzang tshul khirms rgya mtsho, *sku 'bum byams pa gling gi gdan rabs don ldan tshangs pa'i dbyangs snyan.*
『塔爾寺志』青海民族出版社, 1982.
漢訳版：郭和卿訳『塔爾寺志』青海人民出版社, 1986.
- PJ sum pa mkhan po ye shes dpal 'byor, *dpag bsam ljon bzang.*
Lokesh Chandra ed., *Pag sam jon zang*, Calcutta, 1908.
- VS sde srid sangs rgyas rgya mtsho, *dpal mnyam med ri bo dge ldan pa'i bstan pa zhwa ser cod pan 'chang ba'i ring lugs chos thams cad kyi rtsa ba gsal bar byed pa bai d'u rya ser pa'i me long.*
dga' ldan chos 'byung baid'urya ser po, 中国蔵学出版社, 1989.

満洲語・モンゴル語

- 満文『太宗実録』 順治初纂満文本『大清太宗文皇帝実録』中国第一歴史檔案館所蔵。
『理藩院題本』 『清朝前期理藩院満蒙文題本』内蒙古人民出版社, 2010。
「満文国史院檔」 中国第一歴史檔案館所蔵（筑波大学中央図書館所蔵マイクロフィルムを利用）。
『満文老檔』 『満文老檔 訳注』満文老檔研究会, 東洋文庫, 1955-1963。
「礼科史書」 中国第一歴史檔案館所蔵。
『内秘書院檔』 『清内秘書院蒙古文檔案』内蒙古人民出版社, 2003。
ET 岡田英弘『蒙古源流』刀水書房, 2004。

漢文

- 『世祖実録』 『大清世祖章皇帝実録』（康熙11年）,台湾華文書局版, 1964。
乾隆『会典則例』 乾隆朝『欽定大清会典則例』（乾隆28年）,『文淵閣四庫全書』,商務印書館。
「喇嘛伝」 齊克希「錫勒図庫倫旗喇嘛伝匯典」,『庫倫旗志資料匯編』第一輯, 1989。
『選編』 『清初五世達賴喇嘛檔案史料選編』,中国蔵学出版社, 2000。

参考文献

日本語

池尻（栗本）陽子

- 2004 「入関前後における清朝のチベット仏教政策—グライラマ五世招請活動を中心に—」『満族史研究』3, pp.131-46。
- 2007 「太宗～世祖期の清朝とチベット仏教僧—扎薩克喇嘛制度をてがかりに—」『社会文化史学』49, pp.41-58。
- 2008 「康熙朝におけるチャンキャ二世ガワン＝ロサン＝チューデンの北京招請」『内陸アジア史研究』23, pp.49-69。
- 2011 「『清朝前期理藩院満蒙文題本』について」『満族史研究』9, pp.35-42。

石濱 裕美子

- 2011 『清朝とチベット仏教—菩薩王となった乾隆帝—』早稲田大学出版部。
 （原載2007「清初勅建チベット仏教寺院の総合的研究」『満族史研究』6, pp.1-33）

エルデニ＝バートル

- 2004 「16～17世紀のモンゴル宗教史におけるニーチ・トイン一世の生涯」『佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化』山喜房佛書林, pp. 3-23。

森川 哲雄

- 2008 『『蒙古源流』五種』中国書店。

若松 寛

- 1973 「蒙古ラマ教史上の二人の弘法者—ネイチ・トインとザヤ・パンディター—」『史林』56-1, pp. 71-98。
- 1994 「伊拉古克三呼図克図伝考証」『松村潤先生古稀記念清代史論叢』汲古書院, pp.69-75。
- 1996 「《錫勒図庫倫旗喇嘛伝匯典》初探」『内陸亜州歴史文化研究—韓儒林先生記念文集』南京大学出版社, pp.397-411。

中国語

陳 小強

- 1992 「試論西藏政教上層与満洲清政権の初次互使」『西藏研究』2。

丹迥冉納班雜・李 徳成

- 1997 『名利双黄寺—清代達頼和班禪在京駐錫地』宗教文化出版社。

郭 美蘭

- 2000 「五世達頼喇嘛入覲述論」『明清檔案与歴史研究論文集』中国友誼出版。

黄 顯

- 1993 『在北京的蔵族文物』民族出版社。

李 保文

- 2005 「唐古特・伊拉古克三呼図克図考」『中国蔵学』70, pp.52-58。

馬 汝衍・成 崇徳

- 1986 「伊拉古克三史事考辨」『民族研究』5, pp.62-70。

蒲 文成

- 1990 『甘青蔵伝仏教寺院』青海省人民出版社。

張 羽新・劉 麗楣・王 紅・張 双志

- 2008 『蔵族文化在北京』中国蔵学出版社。

欧文

Ahmad, Z.

- 1970 *Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century*; Serie Orientale Roma XL.

注

- (1) ETによると、セチェン=チュージェは1625年にパンチェンラマ一世から「国師(グーシ)」号を授与されたという(ET, 310)。ETには多くのバージョンが存在するが、代表的な5種類のテキストを併記した森川(2008)を確認すると、セチェン=チュージェに関する記述は何れのバージョンでも収録されており、内容も概ね一致している。本稿では、最良とされるウルガ本を校訂したデ・ラケヴィルツ本を底本とする岡田訳を用い、その頁数を示した。
- (2) 満文『太宗実録』巻63, 崇徳7年10月己亥(2日)条。
- (3) 満文『太宗実録』巻64, 崇徳8年5月丁酉(5日)条。その後一行は、翌木猿年(順治元1644)後半にラサへ到着している(D5N, I 124a)。
- (4) DC漢訳版(176)では「僧山」の字が当てられている。
- (5) 原文には「gdong can」とのみ記されているが、本稿ではDC漢訳版(176)の「獅面母」(seng ge'i gdong can)とする解釈に従った。
- (6) 例えば、丹迥・李(1997, 11-13), 張・劉・王・張(2008, 144-45)など。
- (7) 但し、これは6代後の転生者でクンプム寺密教学堂第66代長となったイシー=テンジン=ニマ(ye shes bstan 'dzin nyi ma 1866-?)の略伝の中に、前世譚として収録されたものである。チュージェ=チンパ=ギャンツォ自身とクンプム寺の関係は何も記述されていない。
- (8) 漢語からの音写と思われ、KD漢訳版(226)では「聖海」という字が当てられている。先のDC中のzin shanに当たるが、既述の如くDC漢訳版では「僧山」と復元されている。
- (9) KD(281-82)には、ツォチュン=ルルウエー=ロドゥー(Mtsho byung rol ba'i blo gros)という人物が著した『歴代転生者の伝記、如意樹(skye phreng rtogs brjod dpag bsam ljon pa)』という書物に依拠したと述べられているが、この書物に関する詳細は不明である。
- (10) シレットゥ=フレーの統括者に与えられる職位名称。ジャサク(Man. jasak)は、「執政」を意味するモンゴル語(Mon. jasay)から満洲語に取り入れられた語彙である。「ジャサク大ラマ」(執政たる大ラマ)という職位名称の使用は、清朝が領内のチベット仏教界にモンゴルのジャサク旗制に準じた組織管理体制を構築する意図があったことの現れと考えられる(拙稿2007)。
- (11) アシャン=マンジュシリは、当時の清朝史料では「マンジュシリ=フトクト=ラマ(Man. Manjusiri kütuktu lama)」の名で記録されている。太宗期の満文史料に現れるアシャン=マンジュシリの活動については、拙稿(2007, 44-46)にて論じた。
- (12) 本来の意味は「囲われた空間」であるが、一般にテント群などを意味する。
- (13) 当時のウシタク座主か、或いは第46代ガンデン座主サムロ=チンパ=ギャンツォ(Bsam blo sbyin pa rgya mtsho 1629-95, 在位1692-95)を指すと思われる(VS, 95)。
- (14) VS(339)に該当記事がある。
- (15) タンリン寺とパージョ寺はウシタク寺と同じく現在の青海省民和県回族土族自治州、ドツァン寺は北隣の楽都県に位置する。
- (16) テウオは甘粛の南部、四川・青海との境界に位置する地域を指す地名である。ラサの大僧院に属するカムツェン(khams tshan)の一つであろうが、どの僧院・学堂であるかは不明。若松(1996, 408)はデプン寺ゴマン学堂所属であろうと述べているが、その根拠は示されていない。
- (17) 「喇嘛伝」137。以下、シェーチャ=ルンドゥブ伝は「喇嘛伝」(137-40)による。
- (18) 盛京の四方に建立された塔と寺(北塔寺=法輪寺, 東塔寺=永光寺, 南塔寺=広慈寺, 西塔寺=延寿寺)。石濱(2011, 42-57)が四塔寺建立の背景にある思想を明らかにし、併せて氏が2005年に訪問した際の現状報告を記している。
- (19) 例えば、順治14年にジャサクラマというチベット仏教管理ポストが設置された際、京師北京・陪都盛京・南モンゴル最大の都市フフホトと並んでシレットゥ=フレーにもポストが置かれた事実からも、当時のシレットゥ=フレーの重要性が窺える。
- (20) 本稿では、著者が2007年に現地で書き写した法輪寺満文碑記からの拙訳を用いたが、石濱(2011,

—成立初期の清朝におけるアムドの寺院と僧たち—

- 47-48) は満・蒙・漢・蔵文全てを参照して碑文の全文和訳を掲載している。
- (21) ネイチ=トイン (Mon. Neyči toyin 1587?-1653) は、17世紀前半、主に南モンゴル東部で布教活動を行ったオイラト出身の僧である。ネイチ=トインの生涯については、若松 (1973)、パートル (2004) を参照。
- (22) このことは、近年影印出版された『内秘書院檔』(第1輯, 204-05) でも確認できる。
- (23) 陳 (1992) を参照。
- (24) 『選編』(2-3) を参照。
- (25) 但し、このことはDCにも「喇嘛伝」にも記されていない。
- (26) 「スムパは『メルゲン=チュージェ=リーキャ=サカル=ラマ (Me rgen chos rje lī kya sa kar bla ma) によって維持がなされ、かつてはタンリン寺の支部であったが、最近では自立を維持している。そのため、セルティ庵 (Ser dris ri khrod) もここの支部となっている』と説明している」(DC, 214b)。スンパとはスンパ=ケンポ (Sum pa mkhan po ye shes dpal 'byor 1704-88) のことで、その著作PJ (346) に該当箇所が確認できる。
- (27) 蒲 (1990, 27-28) を参照。なお、著者は2011年9月にパージョ寺を訪れ、ケンポを務める白公巴傑氏に寺の歴史と現状を伺った。氏によると、元来はセチェン=チュージェに贈られたとされる国師の詔書や印章などが寺に保管されていたというが、1958年以降行方が分からないという。現在、清代の文物としては、メルゲン=チュージェが康熙帝より贈られたとみられる扁額のみ寺内に残されている。

附記

本研究は、平成23年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。